

文学は医療に貢献できるか

～物語・文体・認知の視点から～

小比賀 美香子 (岡山大学)
奥田 恭士 (兵庫県立大学)
奥 聡一郎 (関東学院大学)
寺西 雅之 (兵庫県立大学)

0. はじめに

本シンポジウムでは、文学と医療・看護分野の接点であるナラティブ・メディシンに焦点をあて、物語・文体・認知の視点から医療における文学の役割および貢献の可能性について議論を深めた。まず、小比賀が医療現場におけるナラティブの意味と活用例について問題提起し、引き続き奥田、奥、および寺西が物語論および文体論の視点から具体的な分析事例を提示した。対象となったテキストは、カズオ・イシグロの小説（文学）、ライフレビュー（介護老人施設入所者による語り）、さらに文学と非文学の中間ジャンルである『潜水服は蝶の夢を見る』、『脳に棲む魔物』である。4名の講演・発表に続き、フロアの質疑を含めて活発な意見交換が行われた。

1. 医療におけるナラティブ（小比賀 美香子）

本発表では「医療におけるナラティブ」と題して、文学が医療にどのように貢献できるのか、内科医・医学部教官という立場で考え、以下の4項目に分けて示した。

(1) 医療におけるナラティブ・アプローチ

1980年に、医療人類学者、精神科医である Arthur Kleinman によって、疾患 (disease) と病い (illness)、説明 (解釈) モデルの概念が提唱されて以来、医療におけるナラティブ・アプローチは、Trisha Greenhalgh による Narrative-Based Medicine など、欧米を中心に複数発展した。

(2) ナラティブ・メディシンについて

リタ・シャロンのナラティブ・メディシンは、「病いのストーリーを認識し、吸収し、解釈し、それに心動かされて行動するというナラティブ・コンピテンス (物語能力) を通じて実践する医療」と定義される。その主要概念は、Attention (配慮)、Representation (表現)、Affiliation (参入) である。シャロンによるナラティブ・メディシン実践ワークでは、文学作品の精密読解や、マインドフルに音楽を聴き、絵画鑑賞して省察作文を書くなど、Attention (配慮)、Representation (表現) にフォーカスをあてたトレーニングを実施する。

(3) 学生教育での取り組み

岡山大学総合内科では平成 29 年度より、学生実習に、物語能力の涵養のための医学生向けのトレーニングを取り入れている。文学作品や絵画を用いた省察作文のほか、カルテには書かない患者さんとのやり取りや、患者さんへの思い、自分の考えを綴るパラレルチャートを導入。他者の視点を考える、また自己省察する良い機会となっている。トレーニングにより物語能力が向上したかどうかは、今後の検討課題である。

(4) 医療者からみた文学への期待

医療はサイエンスとアートから成るとされるが、現在の臨床、医学教育においては、まだサイエンスが重視される傾向にある。疾患 (disease) に比し、病い (illness) についての医療者の知識は乏しい。サイエンスによるエビデンスを重視した標準的治療は今後も重要ではあるが、アートによる個別のアプローチ、癒しについても発展が望まれる。アートによるアプローチのひとつと考えられる物語能力を通じて実践する医療、またそのトレーニングの過程で、「文学」の果たす役割は大きいと考える。文学の力で、心を使える医療者が増えれば、もっと温かい医療を提供できるようになると期待している。

2. 医療におけるナラトロジーの役割～リテリングの視点から（奥田 恭士）

本発表では、「語ること」(telling) に対する「語り直すこと」(retelling) に着目し、物語論の立場から分析を試みた。対象は、ライフレビューの summary (介護老人保健施設入所者の語り)、闘病手記『潜水服は蝶の夢を見る』(Jean-Dominique Bauby)、カズオ・イシグロの短編『日の暮れた村』である。それぞれ「要約」(summary)、「転写」(transcript)、「代理的な経験」(vicarious experience) をキーワードとして考察を加え、認知と表現の相関という意味において、文学研究が「ナラティブ・メディシン」に寄与できる可能性を探った。

(1) 「要約」(summary)

対象は、共同研究者が提供するライフレビュー・データのうち、言語的コミュニケーションに非言語的な観察

記録を追加した1枚のシートである。左側に自由記述の大きなスペース(要約)、右側には小項目に細分化された観察欄(記録)という体裁で記述されている。これまでの分析例の中から、1つだけ例示した。この事例は「要約」がうまくいかなかった場合に当たる。語り手に及ぼす侵襲性がなく、インタビューが2回目になったときの共感度は相互に高いにも関わらず、対象となる語り手が理解できないと聞き手が「要約」の中で記述する現象を、物語論における一種の「境界侵犯」(メタレプス)と解釈し、更には、語り手の認知機能が低いことを示す身体的指標(パラテキスト)を裏づけとして、聞き手の「語り直し」の中に「要約」の論理性から逸脱する要素が入り込んでいる点を指摘した。

(2)「転写」(transcript)

ライフレビューが非文学テキストだとすれば、ここで扱う闘病手記は、文学テキストとの中間に位置する。ここで問題となるのは、一例目と異なり認知において語り手が明晰であるにも関わらず、表現手段としては「まばたき」しか持たないという、極度に限定された状態にある点だ。そこで、語り手の内容がどのように「転写」されていくかという側面に着目した。Catherine Emmottは「闘病手記」における Schema Clash を例示するが、本発表では Claude Mendibil という献身的な transcriber の「介在」を取り上げ、明晰な認知を持つ語り手が、自分の意図と表現を代理的に「語り直す」(＝転写する)存在との間で、そのような「関係性」を持つかについて考察した。また、一連の困難な作業を遂行するプロセスの中で、「介在者」の内面に生じた変化についても言及した。

(3)「代理的な経験」(vicarious experience)

臨床現場での問題の多くは、認知の程度に関わらず、表現の「欠如」から派生すると考えられる。「語り手」と「聞き手」、更には Rita Charon の言う Emplotment に関わる「解釈者」の役割にも目を向ける必要がある。その意味で、作家は「語り手」「聞き手」「解釈者」を同時に引き受けながら、作品制作を行っている可能性が高い。そこで、最後に文学テキストの例として、カズオ・イシグロの短編『日の暮れた村』を取り上げた。一般に「信頼できない語り手」がイングリッド作品の根幹にあるとされるが、本作はその原点とも言えるべき短編である。そこには「薄明のような認知」「核心を回避する表現」「自己を韜晦する曖昧な語り手」がいる。場所はイングランドとされるが、他の要素(who, what, when, why, how)がすべて不明であり、記憶のフラッシュ・バックと隠蔽を主人公に繰り返させたあと、作者は最終場面で「バス」という metaphor を用いることによって、「忘却」の持つ“救い”を描いている。そこには「記憶」を主題とするプルーセント的な原型が認められ、ヘンリー・ジェイムズがバルザックの特徴のひとつとして捉えた「代理的な経験」(vicarious experience)という視点設定が可能である。データ分析において、この視点が主要な説明概念となりうるかについて検証することが、今後の課題となる。

3. ナラティブと文体の境界：教育、メディア、医療へ(奥 聡一郎)

本発表では、ナラティブ、談話の定義を再考し、先行研究を概観、さらにメディアの発達、コーパスの活用を視野に入れ、医療テキストにおけるナラティブと文体分析の可能性を示した。まず、“a technique of constructing narrative units that match the temporal sequence of that experience” (Labov and Waletzky 1967) といった古典的な定義、“A narrative is a perceived sequence of non-randomly connected events, typically involving, as the experiencing agonist, humans or quasi-humans, or other sentient beings, from whose experience we humans can ‘learn’.” (Toolan 1988, 2001:8) といった文体につながる定義を再確認した。従来の談話分析では、会話のやり取り、体験談ナラティブの「声」やスモールトークにおける「自己開示」、教室におけるディスコースを授業研究の一部として取り入れるなど文学以外の他の領域とのかかわりが強かった。最近ではデジタルメディアの発達に伴い、文学テキストばかりか会話などもコーパスとして記録され、分析の可能性が広がりつつある。

まず、Jean-Dominique Bauby による *The Diving-Bell and the Butterfly*. (2008) 『潜水服は蝶の夢を見る』という脳出血で突然の身体の不自由に見舞われた主人公の闘病記を認知文体論の立場から分析した研究を紹介した(Catherine Emmott and Marc Alexander 2015)。突然の認識の状態変化を「前景化」ととらえ、闘病記に現れる文体の特徴を明らかにしている。文章の断片化、小さな変化を大げさにとらえる表現など病状に類似した特徴的な表現の抽出とその機能を特定している。ナラティブが身体と密接な関係を前提として、編まれていることを説得力のある形で示している。

次にコーパスを用いて Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day*. (1986) 『日の名残り』の分析を行った。この作品は「信頼できない語り手」(an unreliable narrator, ‘Of particular concern is the (un)reliability of intradiegetic narrators, i.e. narrators visible, --if only by way of the first-person pronoun--within narrative.’ (Toolan 1988, 2001:78)) が語るナラティブであり、ナラティブの言語的特徴である出来事の継起順・時制、物語の語り手・人称、状態の変化・時制の観点から、一人称を中心にコーパスによる文体分析を試みた。コーパスツール AntConc で語り手が主人公である ‘I’ を検索し KWIC で前後の文脈を精査してみると先行研究で指摘されている

greatness, dignity, professionalism と共起することが多かった。また、語り手の'I' と法助動詞 (may, can など) の特徴的な共起分布も指摘できるなど、コーパスを活用してナラティブの特徴的な傾向を抽出、語り手の意図として説明ができる点で有効な研究手法であることを示した。

最後に対象としたテキストはライフレビュー (介護老人保健施設入所者による語り) であり、これをコーパス化し KH Coder(テキストデータを統計的に分析するためのフリーソフトウェア)を用いて分析した。語り手が語る内容をキーワードとして抽出し、その関連性をむすびつける共起ネットワーク(出現パターンの似通ったものを線で結んだ図、すなわち共起関係を線で表したネットワーク)で可視化することで語り手の話す内容を分かりやすく分析できる。過去の「私」と思い出となる語の関連性が時系列で階層性をなし、記憶が離れば離れるほど共起する語が多くなり、思い出をさす言葉が中心部におかれるなど、記憶につながる語りの様相を可視化することでナラティブの特徴を即時に解釈可能にできる。今後の展望としてナラティブの分析、ひいては医療現場で語り手が何に執着し、何を語ろうとしているのか大量のデータ化から読みとる時間と手間を省いて客観的に分析結果を提示できるという可能性も示すことができた。

4. 文学と医療をつなぐ文体論の役割：カズオ・イシグロおよび「病いの語り」の分析から見えること (寺西 雅之)

本発表では、文学を読み分析することで培われる「気づき力」を、病いの語りの理解と語り手 (患者) への共感へと如何にしてつなげていくかをテーマに、文体論の観点からテキスト分析を行った。分析の対象は、カズオ・イシグロの『浮世の画家』(小説)、スザンナ・キャハランによる闘病記『脳に棲む魔物』、そしてライフレビュー (介護老人保健施設入所者の語り) である。文学および非文学テキストの文体を分析・比較することにより、病い、語り手、そして患者の気持ち・意識の実態に迫り、文学研究・教育による医療への貢献の可能性を追究した。

分析の対象となったジャンルの異なる3つのテキストは、すべて1人称ナレーターによる語りであり、また過去の出来事の再現と記憶がテーマになっている点も共通である。この点を考慮し、分析では、(1) 時系列的な語りとその逸脱、(2) 語り手「私」の性質、そして(3) 複数の声・視点・自己の存在に着目し、それぞれの具体例を示した。分析には、「語りの構造」、「多声性」、「多重焦点化」(poly-focalization)、および複数自己(poly-subjectivization)に関する理論を援用した。以下各テキストの分析を上記の3つの視点に基づきまとめる。

(1) 時系列的な語りとその逸脱：イシグロは、長編第2作目である『浮世の画家』において、記憶や思考の連鎖を通して物語を紡ぐ手法を用いており、例えば、主人公兼語り手の小野が「回想中に行った回想」を思い出す場面がある。また『脳に棲む魔物』の語り手スザンナは、自身の闘病記を時系列に沿って説明するが、彼女の病気の原因を突きとめたナジャー医師が登場する場面では、彼の少年時代にまで遡った描写を行い、時系列性が崩れる。一方、ライフレビューの語り手は、時折聞き手である学生を意識し、自分自身の若い頃と現代とのギャップに言及する等、時折時系列性が乱れる場面があった。

(2) 語り手「私」の性質：イシグロの語り手は、「信頼できない語り手」と呼ばれ、小野も同様の性質を時折露骨に示す。例えば、娘が自分に対して言ったであろう発言を引用する場面では「節子はそんな不愉快なことをひとつも言っていないのかもしれない。」と発言するなど記憶の曖昧性が度々強調される。またスザンナも一種の「信頼できない語り手」であり、闘病中に記憶が空白もしくはおぼろげだった時間があったことを告白、そしてドクターやナース、友人や家族らの証言あるいは入院中に病院のカメラで撮影されたビデオの抜粋等、様々な力を借り、「曖昧な過去を再現した」と述べている。一方ライフレビューの「私」には、語り手としての自己と回想世界の若い頃の自分とが交錯する場面が見られた。

(3) 複数の声・視点・自己：ミハイル・パフチンは、小説の特徴を「複数の声・視点の共存」と捉えているが、この多声性は、上記の3種類のテキストにも見られる。『浮世の画家』では、登場人物達が日本の戦後の民主主義のあり方について対立する場面があり、このような異なる視点の拮抗は、多声性を生んでいる。スザンナが闘病やそれを患い克服していく自分自身を描写した言葉には、自分自身の思いに加えて、彼女を見つめて評価を加えてきた他者(医師、看護師、家族、友人など)の視点が微妙に描出されており、多重焦点化、あるいは複数自己を具現化している。一方、ライフレビューに関しては、「語り手としての自己」と「物語世界の自己」の区別が有効である。すなわち、回想中に(高齢者の)語り手が用いる「私らわかいもん」という一見矛盾しているとも思える表現には、この2つの役割の融合が見られる。語り手は、話しながら、当時皆で行動した若いころに戻っているのであり、語り手の内面に潜在する複数のアイデンティティの顕在化とも考えられる。

以上の分析を踏まえ、言葉の形式(=文体)に反映された意味を汲み取ることが、ナラティブ・メディスンの実践において、特に Attention (配慮)、Representation (表現) の点において貢献できるのではないかと論じた。